

# 絵島事件に関する考察

— 祐天上人園与の噂をめぐって —

浅野祥子

## 一 絵島事件

正徳四年（一七一四）正月に起きた絵島事件の概要はこうである。正月十二日、五代將軍綱吉と六代家宣廟への参詣として、家宣第三夫人月光院の名代を承り、絵島以下は増上寺へ、宮路以下は寛永寺へ赴いた。そしてその帰途、しめし合わせて木挽町山村座へ赴き、棧敷で正月興行を観劇した。呉服問屋後藤縫殿助手代の差配だった。観劇後、座頭山村長太夫宅へ招かれて宴席がはられ、生島新五郎ら人気役者もよばれて興を添えた。

奥女中が代参の帰りなど密かに観劇することは珍しいことではなかったらしい。しかし、今回の事はなぜか公に事件として取り上げられ、連座者百五十名に及ぶ一大事件となった。処罰はたいへん厳しいのもだった。死罪二名、遠島は表向き九名だが、実は四十余名といい、追放・改易・永のお暇等が続出した。拷問のため死亡した者もいた。

処罰の厳しさについては、この機会を捉えて大奥肅正を狙ったからであるとか<sup>(1)</sup>、家宣正室天英院と月光院の勢力争いが絡んでいたとか、種々の推測がなされているが、事件についてはわからない

点が多い。なぜ彼らの観劇が公に知らされたかも謎の一つである。

## 二 『落葉集』

この小論で紹介するのも、その事（観劇を訴人した者）に触れた史料である。この史料は今までの絵島事件の研究調査の中では扱われていないようである。ただし、内容は明らかに事実と異なる部分を含むので、事件後数多く生まれた噂・風聞の記録の一つであると思われる。しかし、当時どのような噂が流布していたか知るために翻刻しておく。

河原役者生島新五郎と申す者、遠流に処せられたるは世のしる処也、是も江島との常に祐天寺へ参詣するとして、祐天寺へはから籠ばかり遣し、其身はよろしからぬ身持ともありしを、祐天和尚せましき事に思され、折々は上向へも御はなしすへしとてしかれとも、この事のやふれたるは、祐天よりの事にはあらず、或時江島例の茶屋に参り、新五郎を始、大ぜひの役者共を呼よせ酒宴ありし時、御べりの為参りたる御広敷番の頭も、常々内々おほく金銀

などを得たることあれば、江島とののお供は甚よろこひ居たるか、この時其酒宴の席へ出たる江島との酒奥の上、其方はもと此方なと同席すへきものにはあらず、とくだり候へと申はつかしめければ、この番の頭大に怒り、河原ものさへ同席めさる程の老女なれば、われら同席仕りたりとも、何れくるしかるへきと、彼是とあらそひしは、皆打うらよいなためたりとも、なをいかりやまさりけん、翌日常々江島とのゝ身持よろしからさる事を訴し候へは、やふれたりとそ、

この文章は『落葉集』第二十六冊にもあるものである（内閣文庫二一七—二一九）。一見しただけで、江島が常に祐天寺に参詣していた、とおかしな記述が目につく。当時祐天上人は増上寺に住していた。祐天寺は、享保三年（一七一八）の祐天没後、弟子の祐海が小庵善久院をもとに創建し（翌享保四年）師を開山に据えたものである。

『落葉集』の文章は、江島の身持ちの悪さを、祐天上人は以前から知ってたしなめていたが、観劇露見は祐天からではなく、絵島と諍いした御広敷番の頭が訴えたせいであると述べている。

絵島を訴人したのが誰かという問題について、諸史料が挙げている対象は、概ね二つに分けられる。A、参詣先の僧侶の通告、B、味方の下級役人の裏切り、である。『落葉集』はこのうちAを否定してBを肯定している。これは次の三章の分類では2の立場をとっていると言えるが、更に下級役人との喧嘩の様子まで描いている点が他と異なる点である。以下誰が訴人したかという点にしぼって各史料の差異を考え、祐天が訴人したという噂が本当であったのかどうか検証してみたい。（表イ参照）

### 三 絵島を訴人した者

表イは絵島事件について触れた各史料を、訴人した者で分類したものである。欄f、gでは文中で露見の理由として訴人者を書いているものは◎、ある説として触れるにとどめているものは○としている。欄hの型は下の分類に基づく。

#### 1 参詣先の僧侶

「参詣先の僧侶の通告」とは、幼將軍家継の乳人（三女中御刑罰之事略）によると、御書院番芦屋主殿伯母）が同月十六日に参詣に来て方丈で料理を出している時に、増上寺の役僧祐海が話のついでに絵島達が十二日に参詣の折に、方丈に寄らずに本堂から木挽町へ行ったことを告げ、寺が後難に巻き込まれぬよう、頼んだというものである。乳母は帰城後月光院に報告し、御留守居、老中にも達しがあった。

この説をとるのは、『盛衰隠秘録』『及聞秘録』『江島始末集成』（この三冊は、或説として2説も挙げる。）、『江島実記』『一話一言』などである。『江島実記』は主文でこの説をとりながら、罪人それぞれの罪状を述べた欄では、御小人が絵島といったん共謀した後、裏切ったことを書いている。

注意すべき事は、『及聞秘録』『江島実記』のように、事件に連座した人々の罪状が別に記載されている場合、その中の御小人の判決に「罪はあるが翌日申し出たことにより、軽くする」旨の文があることなのである（表イでhの欄が○数字のもの）。つまりこれらの史料は御小人が訴人したのを知りつつも、僧侶説を唱えているのである。特に『及聞秘録』は御小人の差し出した書付の写しまで載せている。

あるいは御小人だけなら問題にならなかったのに、騒動となったのは僧侶の通告があったせいだという意味かもしれない。

## 2 御小人目付

これは『伝奇作書』『讃仏乗』『正徳江島物語』『江島騒動記』『視聴草』、それに今回紹介した『落葉集』などがとる説である（『伝奇作書』『讃仏乗』は同じ作者に依るもの）。なお『正徳江島物語』は残念ながら写本にはあてられなかったが、正徳四年五月の成立で（事件の四ヶ月後）、今回調査した史料の中では一番古い成立である。

## 3 1説と2説両方を肯定する説

『絵島罪断事略』『三女中噂之事』『墨海山筆』『増訂一話一言』等である。

## 4 実録しないもの

『三王外記』『江島始末集成』『江島一件山村座断絶記・同中村座諸用扣日記』『三朝逸事』等である。

『三朝逸事』は、訴人した者は記録しないが、絵島が「隠れもなき派手者」で「増上祐典は疾くより（絵島局は）参詣と言つては乗物だけを寺に着け、自分はすぐに役者と会う場所へ行っていた」と言っていた」と記述する。祐典とは祐天を誤つたものか、憚つたものであるが、これも観劇が露見したあと、知られた事実として書いている。これは『落葉集』の記述と近い点がある。

祐典の発言については真偽はわからないものの、祐天上人が高名だけに事件と結びつけられやすかつたことは言えると思う。『落葉集』が記す「祐天上人が訴人した」という噂は実際にあつた可能性がある。しかしもちろんこれは噂であり、事実は謎のままである。

## 四 当時の祐天上人・その後の祐天寺

当時祐天上人は増上寺法主の立場にあつたが、高齢であり（正徳四年時七十七歳）、辞任願いを出していた（正徳三年（一七一三）十二月<sup>②</sup>）。そのときは許されなかったが、この事件のうちに再度辞任願いを出して受理され、六月十九日隠居している。しかし、祐天に責任を問うつもりが幕府にはなかったことは、祐天没後、祐海による祐天寺建立が新寺造営禁止の中で破格の扱いで認められたことから、明らかである。

祐海上人は祐天の妹の三男<sup>③</sup>だが、幼少より祐天上人に随従していて信者の奥女中との面識もあつたと思われる。1説のように家継の乳母に何事か告げられる立場であることは確かだが、その事実があつたかどうかは不明である。或いは「祐天が訴人した」という噂のもとが「弟子の祐海上人が將軍の乳母に告げた」という話であり、変化した可能性はあるが、これもまったく不明である。

### 〔註〕

- (1) 高木文「江戸幕府大奥 絵島の生涯」『高木文随筆』第2巻 聚芳閣、大正15年。
- (2) 藤本了泰『浄土宗大辞典』山喜房、昭和16年
- (3) 『明頭山寺録撮要』1、祐天寺蔵。  
(祐天寺研究員)

ぐんしよ (季刊) 再刊第46号

平成十一年十月二十五日 発行

a 記事名	b 史料名	c 作者	d 成立年代	e 調査した本	f 僧侶の通告	g 下級役人の裏切り	h 型
	盛衰隠秘録		不明	明治8年写本、内閣文庫	◎	○	1
	及聞秘録			写本、内閣文庫	◎*2	○*2	①
	江島実記		不明	1、写本、国会図書館 2、『江島生島』（江戸文芸資料2、大正5年）	◎	○	①
	絵島始末集成	不明	不明	『高遠の古記録』5（北原通男編集、高遠文化財保護委員会発行、昭和35年）	◎	○	1
	落葉集			写本、内閣文庫	○	◎	2
生島新五郎流罪の話	『伝奇作書』下	西沢一鳳	天保14～嘉永4（1843～1851）	新群書類従1		◎	2
江島流罪一件物語	『讚仏乘』2編下	西沢一鳳		新群書類従2		◎	2
	正徳江島物語	不詳	正徳4（1714）	『江島生島』（江戸文芸資料2、大正5年）		◎	2
	江島騒動記		不明	写本、国会図書館		◎	2
絵島物語	視聽草卷102	宮城成身	天保1（1830）自序	写本、国会図書館		◎	②
	絵島罪断事略		不明	改訂史籍集覧16	◎	◎	3
	三女中噂之事		不明	写本、内閣文庫	◎	◎	3
三女中御刑罰之事略	『墨海山筆』台15巻		不明	写本、内閣文庫	◎	◎	3
三女中刑罰の書付	『増訂一話一言』	大田南畝	安永8～文政3（1779～1820）	『蜀山人全集』4、日本図書センター、昭和54年	◎	◎	3
	有章院殿御実記			『徳川実紀』国史体系			4
	三王外記	東武野訊洋子（伝太宰春台）		写本、国会図書館、中古叢書別本16			4
	江島始末集成		不明				4
	月堂見聞集			『近世風俗見聞集』1、2			④
	江島一件山村座断絶記・同中村座諸用扣日記		不明	『演劇研究』2（林京平、昭和42年4月）			④
	窓の須佐美			『温和叢書』7（明治24年）			4
	絵島生島事件判決「覚」		不明（判決後間もない頃と、今尾氏推定）	「絵島生島事件判決『覚』（今尾哲也、『新聞学に関する諸問題—長谷川了博士古希記念論文集—』、日大法学部新聞研究室、昭和42年）			④
絵島遠流の事	翁草	神沢貞幹	安永5（1776）序	『日本随筆大成』第3期19巻、昭和53年			④
	三朝逸事			写本、国会図書館	○*3		4

\*1(18日) \*2(第15冊に「御小人目付差出書付之コト」とあり、書付の写しあり) \*3(祐典。今回の事件についてはナシ)